世界に於ける魔術の分布（一）

夏見寛治

人類の社會生活に、過去及び現在を通じて一個の重大なる役目を演じてゐるものは魔術 magic, magique, magice である。魔術の同義語としては呪術、幻術、妖術等の語を擧げることが出來るが孰れも動もすれば香具師の手品と混同され易い、しかしながら magic は往古の magi の學術で、この magi は基督をその搖籃に禮拜せんとエルサレムに來つた東方の賢者と同一で、賢者はすべて魔術者 magician であつたのである。

蓋し魔術は原始的人類が最初に得たところの智識の一であつた。マクス・ミユラーに從へば古代埃及人には魔術は實踐的宗教であつた、そして最も多くの智識を有する者は最もよく神を知り、神を喜ばすすべを辨へてその望むところのものを神より受くることが出來るとの信念は彼等をして大學者、大神學者を魔術者と同一視せしめた、Hapu の子にして有名な學者である Amenhotep が啻に豫言者としてのみならず魔術者として信ぜられたのはこの故であるが、この學識と魔術との同一視は特に古代埃及にのみ限られてゐるものではない。(W. Max Müller—Egyptian Mythology.)

僞經 Apocryphes の說くところに依れば、往昔二百の天使が地上 Mt. Armon に降つて女子に魔術と草根木皮の術とを敎へたとある (Éliphas Lévi,—Dictionnaire de Littérature Chrétienne.)。これは傳說上の魔術の起原であるが、魔術がその起原を女性に發してゐることは明かである。太古朦昧の時代に於て、男子が絕間なき食糧の探索と自然との鬪爭に疲れつゝある間に、靜かに

育兒、耕作、牧畜等の業に從つた女子は男子に先立つて諸の智識を獲得したのであつた。

牧穫を大ならしめんとする慾望は女子に耕作牧畜上の智識を授け、その愛兒の疾病は女子を驅つて藥物を草根木皮に求めしめたのであつた。啻にそれのみならず、不可思議なる諸の自然現象を靜かに觀察し得たのもまた女性で、それが解釋を求めんとしたのもまた女性であつた、從つて女性は最初の詩人であり、哲學者であり、醫學者であり、同時に魔術者であつた。(Ian Ferguson,-The Philosophy of Witchcraft.)

そして女性に依つて獲得せられた智識の應用に依つて生活の安定が求めらるゝに及んで男子は女子に代つて智識の獲得者となり、轉て魔術もまたその手に移り、魔術に最も練達せる者最も多く世人の尊敬を受け、遂に魔術は酋長の術となり王者の術となりまた高僧の術となつた、釋迦の幻術、基督の奇蹟、空海の幻術みなそれである。

レヰはその著に於て(Eliphas Lévi,-Histoire de la Magie.)魔術は信仰と科學との一致なりと說いてゐるが、魔術は科學の前提をなすところの擬似科學 pseudo-science であつて魔術が人類から信用を失つた時に宗教が生れたといふことがいへるとすれば、魔術に對する懷疑は科學を生じたといふことが出來るとフレーザーは述べてゐる。(Sir James George Frazer,-The Golden Bough: The Magic Art. Vol. I.)

宗教と魔術とは最も混同され易い關係に立つものである。從つて宗教と魔術との區別は宗教學上の重大問題の一であるがフレーザーは宗教を自然及び人生の過程を嚮導し支配する力を有する超人間的人格者を信仰するものと定義し、その超人間的人格者を喜ばしてその加護を仰ぎ以てその願望を遂げんとすることに於て、人格的媒介物を必要とせぬ純粹魔術と異ることを指摘してゐる。

魔術と宗教との混同は未開人種の間に於て最も顯著でメラネシア土人其他に於てその好適例を發見することが出來るが、亞細亞及び歐羅巴

の諸文明國に於ても今猶その混同を明かに認めることが出來る。近代の歐羅巴殊に佛蘭西の無智階級間に於ける、僧侶は森羅萬象に對して不可抗的な祕密の力を有すといふ信念の存在、日本の神社佛閣に於ける加持、祈禱、厄除け、蟲封じ等がそれである。

魔術に於て、宗教に於ける超人間的人格的媒體と一致する靈的媒介物の取扱はるゝはその實例に乏しくない。魔の術を意味する日本の魔術なる語は實にその起原をこゝに有するものである、しかしながら純粹魔術と宗教とはその超自然的媒體の取扱方を全然異にし、魔術に於てはそれを不人格的媒介物として取扱ふ、卽ち宗教に於てはそれが尊奉せらるゝに對して、魔術に於てはそれが魔術師に依つて使役せらるゝを普通とし、適當なる儀式又は咒文に依つて容易に左右せらるゝものと信ぜられてゐる、例へば古代埃及に於ては魔術師は最高の神さへも服從せしむるの力を有すと稱し、若しその命令に從はざるときは神を撲滅せんとまで脅迫してゐる、また印度に於ては今日にても印度教の三大神たるヰシユヌ Vishnu ブラフマ Brahma 及びシヴ Siva は屢々魔術師の傀儡とせられ、魔術師はその咒唱を以てこれらの神を意の儘に行使すと信ぜられてゐる。印度の俚諺に『全世界は神に從ひ、咒咀は婆羅門に從ふ、故に婆羅門は我們の神なり』といふのがある。婆羅門は印度人民の階級、四性の最高に位するもので、吠陀 Veda を敎へ、他のために行祭し、布施を受くる特權を有するものであるが、吠陀は印度正統婆羅門敎の根本聖典で、その中の阿闍婆吠陀は諸種の災害禍凶を除き、快樂幸福を獲る爲めの咒文を集めたもので、從つて婆羅門は魔術師である。

魔術の起る心理的動機に就てフレーザーの說明するところに依れば其は類似に依る觀念の聯想の誤れる適用と、時間或は空間に於ける繼續に依る觀念の聯想の誤れる適用の二つで、前者は模倣的魔術 homoeopathetic magic or imitative magic を生じ、後者は接觸的魔術 Contagious magic を生じたのである。(Sir James George Frazer,

bid.)

第一の模倣的魔術は『似たものは似たものを生ず』といふ法則、卽ち類似の法則 law of similarity に出發するもので、第二の接觸的魔術は、『嘗て一度互に接觸したものはその物理的接觸が止んだ後にも時間空間を通じて接觸し合ふ』といふ法則、卽ち接觸の法則 law of contact に出立するものである、しかしこれらの魔術はその實施に當つては相結合さるゝ場合が多い、第一の類似の法則に依る魔術は屢々單獨に實施されてゐるが第二の接觸の法則に依る魔術の實施には多くの場合に類似の原則がそれに伴つてゐるものである。過去及び現在を通じて世界の諸民族間に行はれてゐる各種の儀式、呪咀、禁厭、タブー taboo、雨乞ひ等は大部分この二つの法則に基いてゐるものですべて魔術の部門に屬する。

『似たものは似たものを生ず』といふ原則に基く魔術卽ち類似觀念の誤れる適用に依る魔術の最も普通なる應用は、敵に危害を加へ、禍を下さんとするとき、敵の像を作つてこれに危害を加ふることである。これは敵に模したる像に危害を行ふれば敵の身體もまた同時に苦痛を感じ、その破壞さるゝ時には敵の生命もまた終るといふ信念に基き、既に數千年に溯つて印度、バビロン、埃及、希臘、羅馬等に行はれたる記錄が存し、今日猶地球上の全人類を通じて行はれつゝあるもので、或る時代に於て日本にて行はれたかの丑の刻參りの如き、またアイヌ族に依つて行はると聞く藁嵩人形の逆埋めの如きその一例である。

聞くところに依れば北亞米利加印甸人は砂、灰或は土壤に敵の姿又はその身體の一部と思はるゝものを描き、これを鋭い針などを以て突きなどすればその敵はこれに相當する苦惱を受くるものであると信じ、墨西哥のコラ Cora 印甸人は人を殺さんと欲するときは燒土、布片等を以てその姿に模したるものを作り、刺をその頭部又は腹部に打ち込む。しかしこれらの類似の法則に依る魔術は敵に災禍の下るを欲する場合に

のみ行使さるゝものではなく屢々轉禍爲福、快樂幸福の享受を目的としても行はる。例へばその飼養する家畜の蕃殖を欲するとき、コラ印甸人はその欲する動物の像を蠟、粘土等を以て作り、或は凝灰岩を以て刻んで、これを山の洞窟中に置く、これはコラ印甸人は山を以てすべての富を司るものであると信ずるからで、この事實は伊太利のネミ Nemi のデイアナ Diana に捧げられた牛、鹿、馬、豚等の像の因由を物語るものなるべく、恐らくそれは家畜又は獲物の蕃殖を欲した農夫又は獵夫に依つて捧げられたものであらう。同樣に、今日南印度のトダ人Todas は水牛の捕獲の大ならんことを欲するときは銀を以て作つた水牛の像を寺院へ獻ずる。

祕露印甸人はその嫌惡し或は恐怖する者の像を穀粒と脂肪とを揑ねたるものにて作り、それをその者の通過する道筋に持ち出してこれを爛き、馬來人は犧牲となさんと欲する者の切りたる爪、頭髮等を得てこれを蠟にて固めてその者の像を作り七日七晩咒文を唱へて火に翳して最後にこれを燒き、ボルネオの或る部落にては敵に對する報復の手段としてその木像を作りこれを叢林中に遺棄する。

雨乞ひの多くもまた模倣的魔術に屬し、露西亞のトルバッドに近き村落に於ては、降雨を欲するときは三人の者が高き樹の上に昇り、一人は鍋の如きものを叩いて雷鳴に模し、一人は火の附きたる薪を打ち合せて火花を散らして電光に擬し、『降雨師』と稱せらるゝ他の一人は水を以て潤ほしたる木の枝を打ち振りて降雨を眞似クイーンスランドのロックスバラ Roxburgh に於ては土人は雨乞ひの式中に於て男は池の周圍を鶩、蛙、其他のものゝ鳴聲を眞似つゝ跳ね巡り、女子は恰も驟雨に逢ひたるが如く、その頭に木の葉、楯などを翳して走り廻る。日本に於て古來行はる祈雨法の中には前述の露西亞に於けると全く一致してゐるものがある。好古叢誌に『石見國安濃郡川合村の農民が、氏神物部神社にて執行する古傳の雨乞踊といふは、新しき笠を頂き、腰に太鼓を着ける者四人、これを本

役と唱ふ、笠を頂き扇を持ちたるもの十四人、これを添役といふ、本役は東西相對して立ち、添役はその背後に沿ひて、一隊輪の如く立ち並ぶなり、奉行下知を傳へ、本役太鼓を打ち、聲をあげて謠ひ舞ふ云々』とあるがそれで、史籍集覽神明鏡には『……大旱魃以ての外也、農民徒らに孟夏三月を過ぎ四海の民愁る所を思召て弘法へ此由申し請雨の祈を仰出されければ勅に應じて空海……俄に神泉苑の池を堀り清涼の水を湛へて善女龍王を請じ給ふに軈て龍王小身を現はし一尺許りなる小蛇と成つて此池に來り溫雲油然として大雨降り國土を潤ほす云々』とあり、また輟畊錄には蒙古人の禱雨法を錄して『惟取淨水一盆、浸石子數枚而已、其大者若雞卵、小者不等、然後默持密呪、將石子淘漉玩弄、如此良久輙有雨』とあるが孰れも類似の法則に依つてゐるものである。

立山

愛山生

一、概說
二、登山路
　一、芦峰寺口
　二、黑部口
　三、早月口
　四、大町口
三、登山準備
　一、服裝
　二、食料
　三、携帶品

一、概說

和漢三才圖繪に因ると、立山は大寶年間越中の國司四條大納言有若卿の嫡男有頼の開基に係るものとせられ、富士、白山と共に日本三靈山の一に數へられてゐた程、宗教的には早く開けた山であります。現今のやうに登山の隆盛にならない以前でも信仰のために盛んに登られました。越中では男子十五歳になれば必ず參詣したものです。立山へ登らなければ一人前の男とされなかつた位です。出立に際しては村人は馬を美々しく飾つてそれに乘せて村端れまで送り、參詣者は歸りに參詣の證として